彙報

●京都帝國大學文學部國史專攻學生　沖繩九州見學旅行記

昭和七年十月十三日正午吾々廿八名を乘せた台中丸は曇天の神戸を發つて十五日午前十時半大島名瀬に着いた。僅少の停泊時間を利用して平家殘黨の遺趾といふのを見る。まづ大熊村といふに上陸し大島紬の織場、及び道端殊に部落の中央部に群をなして建つてゐる高倉と云ふ約三間四方の建坪に、鼠の入らぬやうに極めて滑らかに刳られた大きな丸太柱をたて地上より二尺程の所を貫木で貫き更にそれより一間程上に堅固な床を添へつけ床と茅葺の屋根の間を密閉し貯藏庫とした穀倉を見、浦上の有盛の墓に至る。北面に「小松有盛君之墓」東面に「土人相傳元曆中平氏一族數百人漂流至于大島隋在分處、蓋有盛君亦在其中、未知住在何塞然隣之浦上村西南數十歩有天女祠、土人謂之有盛君廟墓在祠」、南面に、「西山中半里處、處謂馬鍬封若亡姓字碑石有女巫、歳旨祭之、今年余適來知島事、悼墓地荒穢、因緣臣石墻旁立石表書此爲誌、如其殉年月日則口碑亦亡傳云」、西面に、「文化十三年丙子月日大島代官肥后翁助平盛晨謹誌本府副史行府學助教事宮下希賢書石工山田政盛鴛字」とある。途に大熊美泉、基督教徒の墓あり山には蘇鐵が朱色の果を見せてゐた。飢饉の際、中の白き部分を粥狀にして食ふ。名瀬に歸り大島紬同業組合事務所を見學す。

十六日、晴　午前七時那覇に着く。先づ目をひくは石垣に圍はれた岸邊の家とその上の丘に壘々たる墓である。今度の旅行に於て終始お世話になつた福原兼俊氏を始め多數の人々に出迎へられ一先づ旅館寶來館に落着き、島袋源一郎氏の案内によりまづ波上宮に參拜し昔神體としたといふ陽石、顯德參季大歳丙辰正月廿五日の銘ある朝鮮鐘等を見、隣の護國寺では足掛八年滯在の後ベルリに伴れて行つた宣教師ベッテルハイムの碑及び四百七十年前のものと傳へる大日如來其の他佛畫、佛像數點を見た。本堂で琉球婦人が瓶子と云ふ幅六寸長サ四寸高サ五寸位の箱に、泡盛、米、錢及び線香を入れて縣を入れた手をついて祈つてゐた。線香は竹を細く割つて黑い香を塗つたもので願掛には揃へ願解には亂し神前では焚かず佛前でも實際は多くは焚かず一度使用すると捨てると云ふ。隣の天尊廟には景泰七年丙子九月廿三日の銘ある琉球鐘がある。明倫堂は將軍吉宗に六諭衍義を獻じた程順則の享保三年の創建で首里の國學に對し支那よりの歸化人廿六姓の家の子弟を教授した所、文廟は寛文十一年金正盛の創建、今は崇聖會に維持され毎年春秋二回、豚、山羊を犧牲として祭典が行はれると云ふ。門前に康熙五十八年歳次己亥十月之望翰林院編修二級徐葆光譔并書の琉球新建儒學碑記及び乾隆二十一年の大清琉球國夫子廟碑がある。次いで圖書館に赴き、一行の爲に特に拝觀された冠（ハチマキ）、王妃御衣、重、御德盆、進貢船構造圖、琉球古地圖（天保八年模寫）、

程順則像并書、佛、来人の碑文、先王舊宅碑記、宮古太平山碑（千八百七十三年獨逸皇帝ウィリヤム一世建立）國王頌德碑文、眞珠港碑文等の拓本、尙家の諸王、王子及び徐葆光林文海等の書、正德五年の藤原文兵の出した茶道免狀、東姓世系圖（道光十年）、琉球に關する洋書、琉球辭書及び琉球古織物の標本等を見る。午後は隣の沖繩縣物産陳列館を見、電車で首里に至り尙家邸で家扶百奈氏に案内され銅鑼、喧吶、月琴、胡琴等の支那樂器を主とし外に蛇皮線、四ヶ竹等を加へた琉球樂器、琉球古陶器、孚口、重、飯鉢、湯次、直塗堆金御狀箱、直塗貝摺美硯蓋、御玉貫、御玉垂、御德盆等を拜觀した。邸内には親子戸、黑蝶貝の窓等がある。尙圓王以下歷代の墳墓玉陵は幽邃の境に天然の岩石を利用して漆喰で塗り固め、後は山、前は二重の石垣で圍まれ正面は一段と高く前に石欄があり左右の兩階により前庭に通じ三部に分れ中央部と左部の左端には石塔あり其上に獅子、創造神像を置く。御棺は中央部に入れ次の方がなくなられると洗骨し左右に安置し奉り、每春淸明祭には形を崩さぬ煮物が供へられると云ふ。首里城の正殿は二重屋根の三層で琉球建築の特色を代表したものであるといふが今は修理中で見ることが出來なかつた。その前面、薩使用の南殿、支那使用の北殿は夫々其の國風の建築であるが、守禮、歡會、瑞泉の三門は共に支那式でその形式は牌樓に似てゐる。圓覺寺は支那の寺院を思はしめ、南禪寺のそれを小さくしたやうな山門の前の放生池には支那式の石橋がかけられ、その欄干の彫刻には精緻な獅子が見られる。那覇に引返へし、鐵道によつて一日橋に至り、識名園を見る。客殿の建物は琉球普通の木造朱瓦で棟瓦の兩端が急に上つて持たせた反に柔味がない。前は廣芝生と心字形の池で周圍の樹木と共に幽邃の境を感じさせ、南端の勸耕臺に出れば眼下に綠野が展開する。歸途は車中に、夕陽に映える名橋眞玉橋や多くの墓を送迎して薄暮那覇に歸着した。墓に、龜甲、破風、掘貫の三種あつて何れも前面は石垣で圍んだ廣庭を持ち、正面中央の約二尺四方の石扉の中の室に棺を入れ次の死人のある時、前の屍を洗骨して厨子に收め室の奥の段の上に安置すると云ふ。

十七日、晴　今朝はまづ崇元寺に詣る。正面の石門は三つのアーチ形の入口を持ちその美しい均勢が人の注意を惹く。神庫には歷代の王の祭器、ゲーンと云ふ祓具、及び琉球鐘があつた。首里の町を過ぎて車を浦添城址に駐める。浦添とは浦々を襲ふ卽ち支配する義で舜天王此處に據りて沖繩を平定したと云ふ。城址は北と西は斷崖となり眼下に爲朝出帆の地牧湊、崖下に琉球最古墳「ようどれ」がある。嘗て此の處から乙戌高麗瓦商の銘ある瓦の斷片が發見せられ「おもろ草紙」の大和、高麗に瓦買に行く記事と思合はされる。ようどれは掘貫型の墓で左卽ち入口より英祖王陵、尙寧王陵と並び、兩者の間には獅子のある石塔及びようどれのひのもんを置いた堂があり、最奥には相輪のついた屋根型の石棺の蓋かと思はれるものがあつた。尙寧王は薩兵の檜となつたことを恥ぢて、玉陵に入る面目なしと此處に葬られたと云ふ。再び車上の人となつて普天間に向ふ。こゝの權

現は約三百年前熊野の分神として祭られ拜殿に陽石あり、神殿は約二十間の通り抜けの鐘乳洞の中にある。隣は約四百五十年前創建と云ふ眞言宗の神宮寺である。午後は中城の貝塚趾を見、城址に至る。約四百五十年前の忠臣、護佐丸の居城で彼の滅後、王世子領となり約二百五十年前迄續いたと云ふ。今、護佐丸時代のものと傳へられる御殿、茶碗、菓子器、煙草盆等も皆恐らく王世子時代のものであらう、たゞ石垣、石段等はよく保存されて途上には時々青磁の破片を見ると云ふ。與那原、首里を過ぎ三時に那覇に歸つた。西田、喜田兩先生は教育會の懇講によつて講演に趣かれる。夜は那覇一流の料亭三杉樓に一行の爲に土地の有力者京大關係者等によつて開かれた歡迎會に臨み、琉球踊を見更に沖繩日々新聞社の招待によつて旭劇場で琉球古劇を見た。劇の筋、所作舞臺裝置等能に似、踊の囃子は蛇皮線、琴、吊太鼓、歌は劇の後に聞いた八重山宮古民謠と同じく單調だ。

十八日、晴　病氣した者を宿に殘し南山城址に至る。一部は南山城主を祭る南山神社で、拜殿には火神がある。社後にまはり城と共に亡んだ人々の墓前をすぎ最高所に上ると北西に爲朝が後に妻とした大里按司の娘に初めて會つた和解名の森が見える。城址を下りて西銘祝女の家を訪れ、その着用の衣裝や飾曲玉などを見せて貰ふ。堂は間口三間・奥行二間半位で三方絲、床の間には位牌や神を祭る。前には綺麗な芝生がある。糸滿に引き返し、金を埋めたと云ふ白銀堂に詣る。此處の男はサバネと云ふ刳舟で漁をし妻は夫より魚を買ひ受け此を市に賣ると云ふ。宿に歸つたのは一時半で四時には吾々の首里丸は多くの人に送られ那覇を出た。

十九日、曇　午前九時名瀬着、停船一時間を利用して泥灣の道を急いで、ハブ血清所を見學した。（岩瀬英治）

二十日、曇　午前七時鹿兒島に入港し、下園・堀田兩先輩の出迎を受けて薩摩屋別館に着いた。暫らく休憩し、兩先輩から發表せられた豫定にもとづいて、九時に宿を立ち、照國神社に參拜し、それより西郷隆盛以下十年戰役の戰死者の墓に詣り、墓前で記念撮影をした。ついで南州神社に參拜し、南州館に入つて隆盛、其他の名士の遺墨遺品を見學して、それより道を城山にとり、途中南州終焉の地及び岩城谷の洞窟を見、坂道を城山に上つて眼下の鹿兒島灣及び市街を展望し間もなく下山して圖書館を訪れた。「三州治革圖自大永六年至文錄四年一卷」及び「天保年間舊鹿兒島城下市街圖屏風（模本）六曲半双」其他の地圖類、島津家久、西郷南州等の書狀、薩摩藩府學藏版の諸本竝びに南州手澤本等見るべきものが多かつた。午後は薩摩燒製造所（慶田屋）を見學して、それより島津集成館に赴く途中櫻島を背景に記念撮影をし、薩英戰爭後英國から技師を招聘して始めたといふ磯紡績所蹟を見、集成館に入つて陳列品を見學した。世界人種物圖、齊彬公ローマ字日記、色付の玻璃器、諸種の磯燒器、薩英戰爭に使用した大砲其他の製造に使用した旋盤、安政年間歐書刊行の目的で木版師木村嘉平に彫作せしめたといふ歐文字、其他海外に派遣せられた留學生の寫眞等記憶に殘るものだけでも

少くない。館を出て林泉の美しい磯邸の芝生で我々を訪れられた野中鹿兒島一中校長にも加つて戴いて一同カメラに收つた。それより名物兩棒に舌鼓をうち、櫻島に渡つた時朝よりの曇天は遂に雨になつた。熔岩の奇怪な形を見、萩原賣店主の説明をきゝ、再び海を渡つて宿に歸つたのは薄暮であつた。

二十一日　雨は止んでゐたが空は相變らず曇づてゐた。午前八時下園・堀田兩先輩其他の人々に見送られ、自動車で霧島神宮にむかひ、十時に着いた。拜殿で祓ひ淨められて社殿の建築物を拜觀し、社務所で島津貴久・義久・義弘等の願文寄進狀等の古文書二卷及び義久奉納三池光世作の太刀一振、義弘奉納、長船長光作の太刀一振及び征韓の役に凱旋した時奉納した甲冑四領等を見學し再び自動車で都城驛に着いた。しばらく休んで午後一時二十八分發の汽車に乘り、宮崎で下車して宮崎神宮に參拜し、徵古館で石器時代の遺物其他風俗に關した陳列物を見學した。それより宮崎城址を尋ねたが所在が知れず空しく引返し、宮崎市内を遊覽バスで概觀した。青島は時間の都合上割愛して汽車に乘り臼杵に下車し近藤忠君等に迎へられて豐陽館に入つたのは午後八時すぎであつた。先輩下川氏はわざ〳〵佐賀より來訪せられた。

二十二日、晴　午前八時臼杵中學教諭久多羅木氏の案内を乞うて深田の石佛をたづれ、先づ中尾の丘陵臺地の懸崖にある堂ケ迫下群像を見、阿彌陀如來を背に記念撮影をして、すぐ上隣の上像群三十餘體を見た。これらはいづれも藤原期のものだといふことである。更に上方臺地の甘藷畠の中に「嘉應貳年七月二十三日」及び「千部如法經願主遍照金剛、承安二年壬辰才次八月十五日日次辛亥」の刻銘がある大小二基の五輪塔を見學した。次で大日山の西側日吉社の下方崖に高く刻まれた穗隱水地藏の釋迦三尊に謁し、更に東南の大日山群像十三佛を見た。此集團佛は前二者の比較的完全なのに對して破損の度が甚しく、有名な大日如來の如きも首部は地上に落下してゐり、その脇に佛部、菩薩部、天王部の左右六體があり、之に接して崖高く二王像があるが其の一體は剝離して痕跡を止めてゐるだけである。山を下つて道路に出ると道の側に仁王像が立つてゐり、すぐ前には石の大鳥居がある。それより妙見崖の側にある蓮城法師及び眞野長者夫妻の像及びその側の「永錄十年十一月丁卯」の銘のある石塔を見、次に田間の寶篋印塔型石厨子卽所謂日吉塔を見たが、高さ一丈三尺餘で鎌倉後期か足利初期の形式を保つものだとのことである。新道に出ると丘側に昨春發見せられたといふ「建武元年甲戌九月一日圓寂阿闍利金剛佛仕」の銘がある塔婆があつた。深田を去つて安養寺に同寺所藏の「三藐院信尹公朗詠集卷下（天保六年乙未　進藤筑後守　極書附）」同寺住職慶念の「朝鮮役日記（「慶長二年六月廿四日ニ渡海仕、同三年二月二日ニ歸朝仕候也、安養寺開基慶念狂歌也」の奥書がある）」の草稿本及び淨書本並びに同寺の開基慶念以下の事蹟を錄した緣起等の古文書を見學し、次で大友宗麟の居城であつた丹生城址をたづれ、城壁に刻されたT, I, R, H　等の羅馬字等を見た。それより宿に歸つて

晝食後午後一時すぎの列車で大分に向ひ、途中幸崎に下車して今春發掘せられた築山古墳を見學した。この古墳は前方後圓の完全な形を存してゐるもので、發掘された石棺は大小二個のいづれも組合式のもので、大棺には二個の人體が葬られてゐたさうである。これらの石棺には新に屋根が作られ、築山四柱大神などと墨書した白旗が立てられ禮拜者が多い。八幡神社の社務所で出土品を見學したが大部分は鐵製の武器類であつて、太刀、劍、槍、槍鉋、鏃等が出てゐり、其他のものには、漢式鍑形文鏡、貝釧、朱塊(人口にあつたもの)等があつた。午後三時半長らく案内の勞をとられた久多羅木教諭に別れて大分に向ひ、下車後直ちに元町の石佛を見に行つた。十七佛の方は規模も小さく破損もひどかつたが、民家に接した岩藥師の方は御丈二丈五尺餘の偉大なもので、椎實形の光背があり、衣紋面容等から奈良末期平安初期のものと推定されるとのことである。この群像のみは堂宇が建てられてゐる。それより東南約二里の稙田村に自動車を走らし、土地の少年の案内で高瀬の石窟に刻られた五體の像を見た。本尊大日如來は高さ約四尺、須彌壇上に趺座し、舟形の光背が天井部に折り曲げてつけられてゐる。その右は如意輪觀音、馬頭觀音、左は大威德明王、深沙大將で、いづれも色彩がほどこされてゐる。石窟の右方の小龕中には一莖三蓮の上に三尊の坐像があつた。見了へた時夕燒があかく映え由布鶴見の諸峰が美しく、宛ら我々の見學旅行の無事完了したことを祝するかのやうであつた。再び大分に引返し電車で別府に入り、日名子旅館に着いた。一同は長い間の旅疲れを湯に休め、夕食後西田教授は見學旅行の起源に就て語られ、柴田氏は朝鮮旅行の回顧談をなし、早くも來年度の見學旅行の方面等にも話が及び、自己紹介、中村助教授及び幹事の挨拶等があつて九時和氣曖々裡に解散した。

二十三四日、晴　大部分のものは地獄巡りをなし、午前十一時五十分出帆の紫丸で歸途につき、翌二十四日早朝神戸に上陸し無事歸京した。かくて十一日間にわたる見學旅行を無事終了し得たことは諸先生の御指導、幹事兩君のお骨折によるは勿論殊に各地の先輩有志の方々の御盡力の賜であることを深く感謝して筆を擱く次第である。(大栗傳三)

◉前評議員　中村善太郎氏訃

東北帝國大學教授法文學部長、京都帝國大學講師中村善太郎氏は十二月五日逝去せられた。氏は曾て本會評議員として本會の爲盡瘁せられし所大であり、その後も會員として本會に對し不斷の關心を寄せられてゐた。こゝに謹んで哀悼の意を表す。

◉史學研究會小集

昭和七年十月八日午後一時より、藥友會館講演室に於て、例會として小集を催し、左記の講演と會員茶話會とを開き、有意義な而も愉快な半日を過した。

當日の講演

一、農村計畫としての條里制　文學士　米倉　二郎君
一、鎌倉武家社會に於ける家族の形態　文學士　藤　直幹君
一、歷史地理の方法
——地理學の立場から——　文學士　小牧　實繁君
一、西遊瑣談　文學博士　新村　出君

●史學研究會大會

第一日は十一月二十六日午後一時より京都帝國大學樂友會館講演室に於て開催、左の三氏の講演あり、引續き例年の如く評議員の改選を行ひ、全部重任となる。夜は例によつて晩餐會を開きて後閉會す。

Huss 及び Hussiten の運動に就て

文學士　山中　謙二氏

先づフス及びフッシーテンの運動の經過を年代的に概説された後、講演の主眼點はこの運動の性質を考察し、その歷史的意義を闡明する事にあると述べられた。而してこの運動の性質を明かにするには「歐洲中世の基督教が單に宗教的力なるのみならず、又政治的、經濟的力である。隨つて教會關係の事件は教會内部のみに限られた問題ではなく、社會全般との交互作用によつて、それと密接なる關係に在る問題である。それ故この運動に於ても宗教的モメントが最も重要ではあるが、單にそれのみを考へず、種々なるモメントを考察する必要あり。」として、宗教的・國民的・社會經濟的・政治的の諸モメントを取上げて、その各々に亘つて詳細に論ぜられた。次に、後の宗教改革の運動と較べて見るならば、後者の諸性質は總て前者に見得るにも關らず、而もフス派の運動が宗教改革の如き發展を見せなかつた(かと言ふ)理由の最も主なるものとして、彼等の内部に主義教説の一貫するものなくして内訌を惹起した事、及びチェクの民族的色彩が濃厚に過ぎ、現狀破壞の傾向を帶びたが故に、諸國の警戒心を誘發し、旁〻戰禍久しきに亘るに及んで、妥協氣運が擡頭し、カトリック教會の乘ずる所となつた事等を擧げて講演を結ばれた。

法隆寺金堂壁畫

文學博士　植田　壽藏氏

氏は從來の法隆寺金堂壁畫の研究がそれに現はされゐる畫題の研究か中心となつてゐるが、美術史の研究對象としてこの壁畫を見る場合にはその畫題も勿論重要ではあるが、むしろ繪そのものとして見る事の方が一更重要であるとして、先づこの壁畫の中に肖像畫、風景畫等の濫觴が見られると云ひ、この壁畫のスティルクリティークをなし、構圖はシンメトリカルではあるが、その個々の畫かれたものに於てはすべてに變化が與へられ豐富な多樣性を持つてゐる事に注目し、線のリズム、時間に於て現はれたる線の均合等を見て、およそ日本美術史上に見られるあらゆる要素は既にこの壁畫に現はされてゐると論ぜられ

た。（右二氏の講演はいづれ二氏よりの寄稿を待つて本誌に掲載さるゝ筈である。）

青年結社殊にション會起源に就て　文學博士　長　壽吉氏

本講演に就ては本號所載「青年結社殊にション會起源の說」を見られたし。

第二日は好天氣に惠まれて奈奈に見學を行つた。當日見學せる重なるもの左の如し。

一、春日神社　御神樂奉納、社殿（本社、若宮、寶庫）、古文書（後醍醐天皇綸旨、藤原頼通下文以下）、古鏡、古器類、竹柏（ナギ）原生樹林（天然記念物）、萬葉植物園、

一、東大寺　佛殿（大佛殿、法華堂、戒壇院）、古裂地、發掘出土品（於寶庫）、寫經、圖書、古文書類（於圖書館）

（文責在井上）

●西洋史讀書會

例會　九月二十八日（水）午後七時より百萬遍京都アパート第六階に於て開會、左の研究發表ありて後討論に時の過るを知らず。此日珍しくも法學部教授牧健二氏の出席あり、氏獨特の熱論を聞き興味深きものがあつた。閉會十一時。出席者二十一名。

一、モンロー主義に就て　二回生　信濃　博君

一、古代より啓蒙期に至る進步觀念　二回生　蛇口　三郎君

例會　十月二十八日午後六時半より、樂友會館第一號室にて開催、左記讀書紹介並に井上智勇君の「ローマ共和制沒落の原因に就て」の講演ありて十時過ぎ閉會、出席者二十三名。

一、G. P. Baker; Sulla the Fortunate　二回生　寺田　善次君

例會　十一月十七日午後六時半より、樂友會館第一號室にて開催、此日一ヶ月餘不例入院されし鈴木成高講師退院、この會に出席されたるは目出度し。左の讀書紹介及び研究發表ありて閉會。出席者二十一名。

一、King's Minister in Parliament　二回生　堀　雄夫君

一、近古史の研究に就て　二回生　森崎　周一君

●讀　史　會

例會　昨年九月三十日（金）午後六時三十分より京大樂友會館階上第一號室に於て開會、西田教授、中村助教授以下會するもの四十三名、左の研究發表並に談話あり、午後十一時盛會裡に散會。

○研究發表

一、國學の方法　文學士　柴田　實君

一、百濟寺跡發掘に就て　文學士　岸本　準二君

○談話

一、祖谷の話　二回生　大栗傳三君
一、中世の庄園　三回生　田井啓吾君
一、地藏緣起　西田教授

例會　十一月二十一日(月)午後六時より樂友會館第一號室に於て開會、西田教授、中村助教授以下會するもの二十九名左の研究發表及び談話あり、午後十時二十分散會。

○研究發表
一、室町時代の教育の一面　中村助教授
一、王朝初期の土地制度に關する一二の問題　文學士　福尾猛市郎君

○談話
一、助郷に就て　二回生　青山喬君

●東洋史談話會例會

第二十六回談話會例會
十月十日　午後六時半、樂友會館内にて開催。
演題
一、薩爾滑戰に就いて　今西春秋氏
一、蒙古源流考異　山本守氏
當日出席者　二十名　閉會十時半。

第二十七回談話會例會
十一月七日　樂友會館　五號室。
演題
一、清初に於ける滿鮮關係史料二三に就いて　三田村泰助氏
一、史記封禪書と漢書郊祀志に就いて　藤田至善氏
當日出席者　二十二名　閉會十時半。

第二十八回談話會例會
十一月二十九日　樂友會館一號室。
演題
一、唐代の漕運　外山軍治氏
一、元代蒙古民族に於けるシャーマニズム　堀内修氏
一、東洋學と東方政策　内田吟風氏
當日出席者二十八名に達し從來になき盛會。散會十一時。

●民俗學會

例會　七月二日、學生集會所に於て夕七時より開催。西田教授以下二十二名參會。左の講演あり十時半閉會。
一、原始經濟に於ける交換の一形式　木村武夫氏
一、ドブの呪術師　水野清一氏

例會　十一月八日、文學部陳列館に於て夕七時より開催。西田教授以下二十五名參會。左の講演あり。
一、古代支那人の衣服に關する信仰　森鹿三氏
一、南河内金剛山麓に於ける入會山の現狀に就いて

林部興吉氏

なほ琉球旅行談として、櫻井文三氏の琉球概觀、及び岩城隆利氏の琉球の古典劇の紹介あり。終りに西田教授の琉球の祝ノ口女の話、古代の村落共有性の話などをきく。閉會十一時。

會報

●評議員重任

昨年十一月本會大會に當り會則により評議員の改選投票を行ひその結果前年度評議員全部重任せり。

●會員動靜

入會

東京市杉並區天沼二丁目五六八
（右紹介者　西田直二郎氏）　山中謙二氏

靜岡市東鷹匠町三九　足立茂氏

京都帝國大學史學科　大貫俊雄氏

京都帝國大學東洋史研究室　今西春秋氏

京都市室町今出川下ル　中村清兄氏

京都帝國大學經濟學研究室　若木禮氏

京都市下京區四條富小路下ル　井上淳麿氏

京都帝國大學梵語梵文研究室　岩本裕氏

京都帝國大學經濟學部　張澤博氏

東京市麻布區市兵衛町二ノ一　國華社

（右紹介者　井上智勇氏）

死亡

中村善太郎氏

右謹みて哀悼の意を表す。

●名簿訂正に就いて

昭和七年度名簿發行後に於て御通知ありたる向に就き左記の通訂正す。

退會

滋賀縣野洲郡速野村洲本　内田顯英

仙台市仲島町八〇　山本林

東京市世田ヶ谷區世田ヶ谷町代田六八二　志田義秀

左京區吉田上大路町六ノ一　小澤方　丁士選

仙台市花壇五五（死亡）　中村善太郎

轉居

京都

左京區黑谷山　西住院内　秋貞實造

左京區一乘寺堀之内町三　寺岡方　岩根保重

左京區田中里之内町一一　宮崎方　佐藤正義

左京區岡崎眞如堂町一三　松井方　佐藤良二

左京區吉田二本松町五五　中川方　田邊晃

左京區上大路町一九　那波利貞

府下船井郡園部町小櫻町六五　野村政光

東京

澁谷區千駄ヶ谷町三丁目五四〇　今井登志喜

府下大森町山王一八五六　小松綠

澁谷區代ヶ木山谷町二四六	坂本太郎
府下砧村　成城高等學校內	田中宣太郎
世田ヶ谷區世田ヶ谷町二丁目一二七〇	中島利一郎
小石川區丸山町三〇　小石川アパート內	肥後和男
大阪	
西成區粉濱東之町三ノ一二	森繁夫
地方	
廣島市已斐町二二六六	岩間武雄
福岡市桝木屋町二七	井上智爲
鹿兒島市池ノ上町八三	尾崎庄助
岡山縣兒島郡莊內村用吉	小橋淺雄
宇和島市櫻町一〇ノ二	芝文雄
長野縣立大町中學校內	須甲理喜
川崎市渡田新町二二九	戸倉廣
岡山市門田伸町九五ノ四	藤澤吟治
姫路市八代一〇〇	横地得三
滿鮮	
大連市山手町一七ノ二ノ八	河村久三郎
京城府三坂通二五七官舍	高木善人
改稱	
東京	
澁谷區神山町四五	鍋島直康
澁谷區原宿二丁目一九六	藤木邦彥
杉並區阿佐ヶ谷六丁目二一三	龍肅
地方	
福岡市紺屋町二一	中江健三（井上改）

◆寄贈交換圖書雜誌目錄

法制史研究一（「法律史」と「法制史」との限界	飯田忠純著）
東洋史上よ日本上古史研究一（耶馬臺國論考）（橋本增吉著）	高原書店
德島市鄕土史論（島田泉山著）	大岡山書店
史學雜誌　四三の一〇、一一	島田廉壽吉
歷史地理　六〇の三、四、五	史學會
民俗學　四の九、一〇、一一	日本歷史地理學會
考古學雜誌　二二の九、一〇、一一	民俗學會
信濃　九、一〇、一一	考古學會
人類學雜誌　四七の九、一〇、一一	信濃鄕土研究會
國立北平圖書館々栞　六の三、四	東京人類學會
經濟論叢　三五の四、五、六、	國立北平圖書館
國史學　一二、一三、	京大經濟學會
國學院雜誌　三八の一〇、一一、一二	國史學會
史迹と美術　二三、二四、二五、	國學院大學
哲學研究　一七の一〇、一一	史迹美術同攷會
史蹟名勝天然記念物　七の一〇、一一、一二	京都哲學會
大谷學報　一三の三	同保存協會
鄕土研究叢書　二	大谷學會
史學　一一の三	山形縣鄕土研究會
上代文化　八	三田史學會
宗教と藝術　一三の四	國學院大學上代文化研究會
史潮　二の三	龍谷大學文藝部
皇學　一	大塚史學會
青丘學叢　七、九、九	神宮皇學館館友會
	青丘學會